

国語外国語化論の再考 II

— 森有礼の「国語英語化論」と志賀直哉の「国語フランス語化論」について —

山井徳行

Sur les Propositions du Remplacement du Japonais par une Langue Etrangère II

— Celle de M. Arinori MORI et Celle de M. Naoya SHIGA —

Noriyuki YAMAI

(本稿は、名古屋女子大学 紀要 第50号記念号 人文社会編 平成16年3月に発表した『国語外国語化論の再考 I』の続編である)

第五章 志賀直哉の国語フランス語化論

昭和21年に発表された志賀の小論は、3200字しかないといってもここで全文を掲載するにはやはり長すぎる。しかし、序章(上述の拙稿「国語外国語化論の再考 I」を参照)でも述べたように、この小論は門前払い同然の取り扱いで、その要旨が詳細に検討されることもあまりない。そこで、新漢字・新仮名遣いに直し、縮約して掲載したい。以下のようになる。

今は日本が経験するもっと厳しい時代だ。茫然自失になっている。もっとも不安なのは食糧問題だ。それにインフレ・教育・失業などだ。外地の同胞も心配だ。伝染病・犯罪が多発しているが、有効な対策は実行されない。言論の自由や平和は有り難い。

日本の将来を考えると一番大きな問題は国語問題だ。

国語に慣らされているので敏感になれないが、これほど不完全で不便なものはないし、文化の進展も大変阻害されている。この解決なくして、文化国家としての日本の将来はない、といっても過言ではない。

具体的な指摘は出来ないが、日本語の不完全さ・不便さは作家として痛感して来た。

仮名書きやローマ字書きの運動も成果を上げないのは、致命的な欠陥があるのだろう。

六十年前、森有礼が国語の英語化を唱えた。それが実現していたら、日本の文化も遙かに進んでいたろうし、この戦争も避けられたであろう。学業ももっと進み、学校生活もずっと楽しく、成果も遙かに上がったろう。英語を自然に使いこなし、日本特有の語彙をもでき、万葉集も源氏物語も英語により多くの人に読まれていたであろう。

六十年前に、英語を採用していたら、利益が無数にあっただろう。後年になって国語と別れるのか辛い、六十年前だとしたら、どんなによかったろうか。

国語改革の必要は皆に是認されて、私が発起人になった研究会もできた。しかし、完全なものを造り出すことに関しては非観的だ。

そこで、私は世界で一番いい言語、一番美しい言語、フランス語を国語に採用する英断をするべきだと思う。森有礼の案を今こそ実現するほうが、国語の不徹底な改革より間違いの

ないことである。彼の時代では不可能であったろうが、今なら実現可能である。過去に執着せず、我々の利害を超越して子孫の為に英断をすべきだ。

外国語のことはよく知らないが、フランスは文化先進国でもり、小説や韻文でも日本と共通のものがあると云われる。それにフランス語は文人によって整備された言葉であるとのことで最適と思う。

国語の切換えは、教員の養成が出来た時に小学校一年から順次行なえばよい。韓国語を日本語に切換えた例もある。

国語がどう変わろうと、私は日本語だが、子供や孫のため、国語問題は徹底的に解決して欲しい問題だ。

この時代は未曾有の厳しい時代だ。大怪我の時の神経の麻痺のように本当の苦悩は意識されていない。それは自然の調節作用としては合理的なことだが、実感だけに頼って、真の困難を誤認してはならない。それが国語問題であり、解決しなければ百年千年の悔いを残す。漢字輸入の時よりも、国語英語化論の時よりも、今が遥かに大きな転換期の時期である。それを意識して国語問題を考えなければならない。

今までの国語と別れることは辛いことだ。この今の感情に流されずに、純粋に未来の日本の為に考える必要がある。(以上、志賀直哉全集 第七巻 「国語問題」 pp.339-343の縮約文 責山井)

この志賀の小論は、森の国語英語化論を引き合いに出しているくらいなので、よく似ている。日本語を国語としていては日本に未来はないと二人は主張する。それだから、森は貿易立国として英語を国語とすべきだといい、志賀は文化の進んだフランスの言葉を採用すべきだという。森は富国強兵のために、志賀は文化国家として成功するために、外国語を国語にして日本語を捨てよ、という。

第四章で検討したように、森の立論は現実によって反駁された。21世紀の始めの時点に立つとき、第2次世界大戦の敗戦を経験したとはいえ、アメリカ指導型の民主主義の元に60年近くも平和が続き、その中で経済大国として世界の先進国の一つとして国際的にも重要な地位を占める日本は、森の描いた教育の行き届いた豊かな独立国として世界から認められている。それでは、志賀がこの小論を書いた戦後の混乱期に立つとき、日本はいかなる様相を帯びるだろうか。志賀を始めとして多くの日本人はいかなる気持ちで日本や世界を見ていたのだろうか。日本は外国との全面戦争で初めて無条件降伏の敗戦を受け入れた。東京や大阪・名古屋などの大都市は空襲によって破壊され、広島と長崎には原子爆弾が投下され多くの人が死んだ。そして、マッカーサー司令官の率いるアメリカ軍によって占領された。

多くの日本人は大きな敗戦のショックを受け、一億総懺悔と言われたように戦争を引き起こした過去を反省し、志賀の文にもあるように世情が安定しない中、未来に大きな不安を持っていたのだろう。何人も時代の偏見から自由ではないから、そのような時代の空気の中で志賀は国語フランス語化論を唱えた。

志賀の小論の論理は、戦争・敗戦という事態を招いた主な原因は日本語にあるという。森有礼の英語国語化論が実行されていれば、第二次世界大戦に巻き込まれなかったといっているのだから。さらに、敗戦の混乱の中、誰もが気が付く物的・社会的問題よりも、日本の未来にとって一番の問題は日本語である、と断定している。志賀の文の中では、日本語という語彙はなく「国語」や「日本の国語」という表現になっている。文脈から日本語と解されて問題はないと思う

が、文言が微妙な問題を含むという指摘もあるので、断って置きたい。また、国語英語化と英語国語化は、ともに日本の国語として英語を採用するという意味で違いはないと解釈し、国語英語化と言い方を採用した。国語フランス語化も国語外国語化も同様である。

それでは、志賀は日本語戦犯論の根拠として何か具体的な理由を示しているかということ、「日本の国語が如何に不完全であり、不便であるかをここで具体的に例証する事は煩はし過ぎて私には出来ないが、四十年近い自身の文筆生活で、この事は常に痛感して来た」（同書、p.340）と、それは周知であるかのように証明を避けている。仮名書きやローマ字書き運動の不成功から、日本語の「致命的な缺陷」の存在が推測されているので、ここでも表記の問題が考えられていたことが推測できる。ただ、有名な作家が長い文筆生活でその欠陥を実感してきたという証言は、志賀直哉だからこそ重みを持つ。

現在の言語学の立場から、二つの言語を比較して優劣をつけることは不可能である。何故なら、価値判断を棚上げすることによって客観的な学問が成立するという立場だからである。このことは文化人類学にもあてはまり、文化の優劣を論じることは同様に不可能である。しかし、学問の客観性がそうであっても、実人生では選択をしなければならない。そのとき、価値判断をすることになる。だから、志賀がこのような判断をしたからといって非難することは出来ない。ただ、その判断の成否を問題にするだけである。そのためには、志賀の価値判断を否定する者は自らの価値判断を示すか、または、志賀の立論に矛盾があることを示さなければならない。

志賀は日本語（もっともそれは当時の表記法のもので、現在のそれとはかなり違うことを考慮する必要がある）は文化の発達を妨げるから、英語かフランス語をその代わりに採用すべきだと明確に主張しているから、英語やフランス語のほうが日本語より優秀な言語で、それらの言語を使用している国は文化も優れているということになる。

このような立場に対する反論は、三つ考えられる。一つ目は、日本語は英語やフランス語よりも優れているし、同様に日本文化も優れているという立場。二つ目は日本語も英語やフランス語と同じように優れているし、同様に日本文化も欧米の文化と同様に優れているという立場。三つ目は、日本語や日本文化という条件はその中に我々は生まれたのであり、他の言語や文化と優劣を比較しても意味はなく、その中で最善を尽くすべきだという立場である。

第一の立場を取ることが難しいと思われるのは、日本語が英語やフランス語よりも優れているという決定的な根拠が見えてこないからである。

言語はまずは音声だが、音素の数を比較すると日本語のほうが上述の二つの欧米語よりも少ない。少ない音素で表現できれば合理的だと論じることができる。しかし、文字の数を根拠にすれば、平仮名やカタカナさらに膨大な漢字を使う日本語は、26文字のアルファベットで基本的に済む二つの言語よりも非能率的だと考えられる。

また文法の整備という観点から見ると、英語やフランス語のほうがきちんと整理されており、日本語の文法はまだ未整理である。しかし、西洋の言語学の影響の支配下で、西洋語とは極めて違う日本語の法則を的確に表現する文法理論が発達していないので、未整理の状態なのであり、整理された暁にはより合理的な文法体系を日本語に見いだすかもしれない。

各言語を母語として話す人口を比べた場合、英語人口は確かに日本語人口よりも多いが、フランス語人口は日本語人口よりも少ない。さらに、その点では中国語人口の多さも考慮に入れるべきだろう。

教育言語としては、三つの言語とも十分に機能している。各言語で大学教育ができることは

周知の事実である。

国際的通用性という観点では、日本語は二つの言語より劣っている。しかし、日本が国連の常任理事国になり、日本語が国連の公用語になれば、将来は日本語の国際性は増大するだろう。言語人口の問題は、国や国際機関の言語政策と密接に関係しているという意味で、経済的・政治的影響を受ける。

このように、言語に関する事項を並べても日本語と二つの言語に優劣をつける決定的な基準を見つけ出すことはできない。ただ、ここでは価値判断中止の学問的客観性からすべての言語がおなじような価値を持っていると主張しているのではない。

第二の立場に関しても、同じことが言える。優劣の比較が出来なければ、同等の比較も出来ない筈である。そうすると、これは志賀の立論自体、すなわち日本語が英語やフランス語に対して劣っているという論を突き崩す。

ただ志賀は自分の作家としての40年の経験から直観的に判断していると主張した。

そのような問題提起に関してどういう態度を取りえるか。それは第三の立場と思う。日本人として日本文化の中に生まれたということは、日本語の中に生まれたのであり、その条件の中で人生のあらゆる問題に取り組むべきであり、日本語が不完全ならば改善していく努力をすればよいとなる。この立場は、日本語を英語やフランス語と比較するのは無意味であり、日本語の代わりに英語かフランス語を採用すべきだという議論は無益だ、とする。

志賀の小論の中で、森の国語英語化論を取り上げて、それが実現した場合の想定をしている。日本語戦犯論もそこに出てくるが、もう一つ驚くべきことを言っている。すなわち、「英語辞書にない日本獨特の言葉も澤山出来てみだらうし、萬葉集も源氏物語もその言葉によって今より遙か多くの人々に読まれてみたらうというような事までが考へられる」(同書、p.340)と。

一見すると奇妙な論と思われるかもしれない。例えば、鈴木孝夫はこの箇所を志賀の論の最大の欠陥と見なしている。その反論は、志賀の国語フランス語化論を真剣に論じた数少ないものなので後で詳しく取り上げたい。

英語を母語にする人間が増えていたならば、万葉集や源氏物語という日本語の古典がより多くの人に読まれていたろう、という志賀の主張は二つのことを意味する。まず、日本の古典は英語が母語になる数世代の間に英語に翻訳されていたであろうこと。次に、志賀がこの小論を書いた時点で、国語が日本語であっても日本の古典はほとんど読まれていないこと。万葉集や他の韻文の翻訳の難しさは、母語のリズムに結びついていることから、計り知れない。翻訳でどれほどその価値が伝わるか疑問である。しかし、志賀は母語が日本語でも読まれていないと言っているのだ。

志賀が暴論とされる国語フランス語化論を敢えて書いたのは何故か。国語の不備、すなわち日本語の欠陥が日本の将来の最大の問題だという直観があったことは先に書いた。それに、志賀は国語をフランス語にしてもその利益は志賀には何もないと強調している。例えば「國語がどう變わろうとも、私自身は今の國語以外に出られないが、・・・」(同書、p.342)とか、一般論として「今までの國語に別れる事は淋しい事には違ひないが、それは今の吾々の感情で、五十年、百年先の日本人には恐らくさういふ感情はなくなつてゐるだろう。吾々は日本人の血を信頼し、さういふ感情に支配される事なく、此問題を純粹に未來の日本の爲めに考へなくてはならぬ」(同書、p.343)と。

志賀には私心はなく、日本国民の幸せ、日本国家のために、この提案をしている。志賀は当時すでに63才で、『暗夜行路』の長篇も完成し文壇での地位は安定していた。戦争を生き延びて、

日本の将来の事を私心なく思っても不思議はない。彼の文学上の仕事はすべて日本語でされたのだから、国語フランス語化論は彼の作品の行方にとって不利であっても有利であることはない。日本語として残ることは確かでも、フランス語に翻訳される保証はなかった。

森は国語に英語を採用することを提案したのに対し、志賀はフランス語を提案している。しかし、彼はフランス語のことはよく知らないと言っている。東京帝国大学の英文科に入学しているので英語の造詣は深いと考えられる。それなのに、フランスは文化先進国でフランス語は文人によって整備された言語で、韻文や散文でも日本と共通のものがあるので、フランス語にすべきだと言う。ここには、森が日本の富国強兵という実利的なものを指向したのに対して、志賀は文化国家建設を指向していた、その違いが見えるだろう。だが、志賀は森の国語英語化論が実現しなかったことをひどく悔やんでいるので、フランス語でなくても英語でも大賛成だったと言えよう。そして、英語とフランス語と比べて、フランス語が世界で一番美しい言語だとかいう当時の一般通念に従って、フランス語の採用を提案したというのが真実だと思う。日本の国家のもっとも根本的な問題を決めるのに、あまりにも軽薄な根拠の挙げ方と言える。ただ、志賀の心中を思いやれば、当時の日本語に対する深い苛立ちが伝わってくる。なにしろ、英語でもフランス語でもいい、とにかく日本語の代わりにその一つを選んでくれと文脈から読み取れる。それも、それが日本の最大の問題だと強調する。

まさに極論に聞こえるが、有名な作家がよく書いたなとも思う。大野晋は、先に上げた『日本語練習帳』の108頁で、小論発表から11年後に座談会で、志賀は国語フランス語化が実現しなかったのは残念だ、あれは単なる思いつきでなかったと強調したと、述べている。

第六章 志賀直哉の国語フランス語化論の検討

すでに、この論を紹介しながら、検討をして来たわけだが、ここでは、志賀直哉のこの提案を真剣に受け止めて反駁し、それを日本人一般の日本語に対する態度、それも偏見的態度として一般化した鈴木孝夫の反論を中心にして、さらに検討を加えたい。

鈴木孝夫は、日本人と日本語との関係を解きあかすことをテーマにしたその著書『閉ざされた言語・日本語の世界』（新潮選書、昭和50年3月）の第一章「日本人は日本語をどう考えているか」で志賀の小論を取り上げている。以下に、特に重要な箇所を引用する。

私が志賀のこの論文を真面目に扱う必要があると思う理由は三つある。第一は、ともかく志賀直哉は日本の文学のある面の代表作家であるということ。次に彼の《日本の国語ほど不完全で不便なものはない》という考えが、未曾有の動乱のさなかにおける一時の思いつきによるものではなく、四十年近い彼の文筆生活を通して、常に痛感されていたことだという点。そして、この文章を書いた頃の志賀は、まだ六十三歳であるから、高齢のための無責任な放言と笑って済ますことは出来ないというのが第三点である。（同書 P22）

このように鈴木は真剣に志賀の小論に対して反論した。鈴木在意図は志賀個人を攻撃するためでなく、志賀のこの論文に日本人全体の日本語に対する一つの態度の象徴を見ようとしている。我々日本人の心の奥に隠れていると思われる日本語に対する、一種の愛想つかしを批判し、反省を求めるところに鈴木在意図がある。鈴木は二つの重要な問題点を次のように指摘する。

私は志賀のこの随筆風の論文を読んで、これまで幾度となく、いろいろな人、それも著名な人によって唱えられてきた《日本語不完全論》の一つの典型をここに見た気持ちがあった。

私の考えでは、この論文には二つの重要な問題が含まれている。第一は志賀が、母国語、ひいては言語と言うものが、それを使う人にとって、どんな意味があり、どのような深いつながりを持っているものかについて全く無知無感覚であるということ。

第二は、志賀が自分の考えを、どのような表現方法（文章）で示しているかである。（同書 P24）

鈴木は第二の点から反駁を始める。表現方法とは文体をも含めた論理展開と理解できる。そして、英語を使用する国が戦争をしなかったとも文化の高い国が戦争を避けることができたとも到底言えないし、そんなことは子供に分かることだと、その点を断罪する。だが、それは敗戦のショックに帰してまだ許せるという。鈴木が志賀の小論の論理的破綻を見ているのは次の点である。すなわち、「六十年前に初代文部大臣森有禮の提案に従って英語を国語として採用しておいたならば、『万葉集』『源氏物語』も、今よりも遥かに多くの人々に読まれていたろうという真に不可解な議論の進め方である」（同書 P25）と続ける。鈴木は、英語を母語にしたら日本語で書かれた日本の古典は読まれなくなり残念だが、その犠牲を払っても国語を英語にする価値があると主張するなら、論理的に一貫性があるという。

しかし、既に前章で指摘したように、国語を日本語から英語に移行するときに、日本の古典は英訳されるという前提に志賀は立っている。その前提を認めれば、志賀の立論が非論理的だとは断言できない。それを鈴木は理解していない。そこで、鈴木が引用した志賀の小論をよく見てみると、「英語辞書にない日本獨特の言葉も澤山出来てみたらうし、萬葉集も源氏物語も今より遥か多くの人々に読まれてみたらうというような事までが考へられる」（同書 P23）となっていて、志賀直哉全集の原文とは違う。その部分だけ書き出すと、以下のようである。

英語辞書にない日本獨特の言葉も澤山出来てみたらうし、萬葉集も源氏物語もその言葉によって今より遥か多くの人々に読まれてみたらうというような事までが考へられる。（下線は筆者）

その言葉とは日本獨特の単語で豊かになった英語のことである。どうしてこのような誤りが起こったのか理解でないが、岩波書店の全集を正しいとすれば、鈴木は肝心の部分を見落として反論を進めたことになる。鈴木が反論では、この点をもっとも重要な論理的破綻とされており、そこにいま指摘した勘違いがあったとすると、我々は鈴木が反論に賛成できない。

それどころか、志賀が夢想したように、英語が国語になっていて万葉集や源氏物語が英訳されていれば、広く読まれている可能性が高い。この主張にこそ、志賀の論の説得力がある。当時の日本の古典はその表記の複雑さ故に、極めて難解であり、読者は限られていたと思う。英訳されていれば、英語を母語としたであろう日本人にははるかに読みやすかつたであろう。読まれるか読まれないか、その内容次第ということになろう。英語を母語にして日本文化から離れてしまった日本人が日本語が母語であった日本人の古典にどれだけ興味を示すかは未知である。だが言語的にはより読みやすくなる筈だ。

この点では、フランス語を採用しても同じことが言える。確かに、志賀が国語フランス語化論の根拠として挙げている理由は、「世界中で一番いい言語、一番美しい言語」とか、「フラン

スは文化が進んだ國」といった大まかな一般論で、説得力に欠ける。ただ、翻訳によって古典がより身近になるという点は言語的には正しいと思う。旧漢字や旧仮名遣いの表記の問題がないし、たとえ現在の日本語の基準に立って考えても、同様のことが言える。漢字表記の問題がフランス語や英語には無いからだ。

そして、志賀の小論では表題が「国語問題」となっているのを見ても分かるように、日本語は駄目だと特に言いたいのだ。志賀はフランス語がいいと言っているが、文脈から見れば英語でもいいということになる。なにしろ日本語をよくする希望は無いから、日本語はフランス語か英語に代えるべきだと主張している。ドイツ語が出てこないのは、ナチスドイツが戦争を始めたという認識があるのかもしれない。

ここで中間まとめをすると、日本語戦犯論やフランス語ミスワールド説は説得力はないが、古典の普及という意味ではなかなか説得力があるとなる。そして、志賀の小論の主旋律は日本語に対する呪詛であり、それは胸に突き刺さる。これに対して為される反論は当然、母語に対する愛情の欠如と、日本人であることと母語との密接な関係への無感覚の指摘となる。

鈴木は、美という基準は主観的なものであり、完全性という基準も同じように無意味だという。「すべての言語(国語)は、それを使う人々にとって、一番びったりとした、つまり最もすぐれた言語なのだ」(同書 P29) と、母語の掛け替えのなさを引き合いに出す。そして、「どこの国でも、自国語の美しさ、かくれた能力を目ざとく見つけ、歌い上げるのが詩人であり文学者なのである」(同書 PP29?30) といい、ツルゲーネフのロシア語に対する愛情について語る。どんな人間にとっても、母語こそがもっとも完全で、故に美しいとなる。この考えを前提にする論理展開は、当然、志賀の日本語への態度を否定することになる。しかし、鈴木は論理は現実によって反駁される。すなわち、志賀は自他ともに認められた文学者であり、日本語の秘密の力を見つければ愛情を持たなければならないとなるが、彼は日本語を捨てよと主張した。志賀も日本語を捨てるのは淋しいと言っているから、愛情はあったのだろう。それにもかかわらず、日本の将来のためにフランス語を採用したほうが良いと言ったのだ。さらに、鈴木は志賀のこの言語観が多くの日本人によって密かに共有されていると考えている。その病理を分析して、自国語に愛着を持つべきだとその本では主張するのだが、彼が立てた前提が日本では崩れていることを認めたことになる。

次に考えられることは、志賀の国語フランス語化論が実行されてフランス語が母語になれば、その時の日本人にとってはフランス語がもっともすぐれた言語になる、ということだ。そうすると、言語の移行期に生まれた人間には不便だが、完成された暁には不便は解消される、となる。移行期に生まれた人間達は自分達の人生をそんな不便を凌いで犠牲にしない、なぜならば日本語という母語があるという論理は成り立つし、実際のところこれが一番強力な反論だろう。それは実利的で現実的な反論だからだ。

この反論に対して、志賀が生きていたらなんと答えるだろうか。多分、日本の将来のためにこの不便を凌ごう、それに、移行期は日本語とフランス語を併用したらいいと言うだろう。実際に、それは可能だろうと思う。

日本人としてのアイデンティティを全面に出す反論は鈴木はしていない。と、言うよりも、「私の興味は、どうして日本人は自分の父祖のことば、母国語を、かけがえのない大切なものと考えないのかを解明することにある」(同書 P30) という立場から、日本人の文化的アイデンティティを守るためにはけして母語を捨ててはならない、という立論は難しいだろう。

また、鈴木は、同じ本の中で海外に住む日本人が日本語を捨てる傾向を指摘したあとで、「人

にはそれぞれ自由がある。日本語を使わない自由どころか、日本国籍を捨てて、外国人になる自由さえも、私たちは持っている筈である」(同書P15)という。日本人には日本語の代わりにフランス語か英語を採用しようとする自由があるということになる。この鈴木の場合では、志賀の国語フランス語化論には論理的に反駁できなくなる。

鈴木は、志賀の小論の論理的支離滅裂さを攻撃し、英語でもフランス語でも志賀は同じように非論理的文章を書くだろうと、指摘したあとに、日本の物理学者達の英文論文を批判した文章を引用し、「日本的発想」をそのまま英語に移すと滑稽な文になってしまうと続けて、「要するに、日本語が不完全で曖昧だから、英語やフランス語に替えれば明晰になるだろうなどと考えるのはとんでもない誤りであって、ことばそれ自体、文章表現そのものに対する日本人の考え方を変えなければ、どこの国の言葉を使っても、論理的に支離滅裂なことしか言えないことが明らかにされているのである」(同書P28)と、結論する。

ここで問題となっているのは、言語と文化的アイデンティティの関係である。鈴木の場合この議論は、本多勝一などによっても主張される。すなわち、日本人が明晰な文章を書けないのは、日本語のせいではなく、その人の文章に対する態度による、というものだ。

ただここで、鈴木の場合には矛盾があると思われる。日本人が日本的発想をもつのは、または断言を避ける曖昧な言い方を好むのは、日本語がそれらの表現を正当とするからであって、まさに日本語によってそのように文化的に導かれるのである。言語が我々の思考をある程度、規定するとすれば、日本語を母語とするかぎり、曖昧な言い方を是認しなければならないのではないか。日本人がその断言を避けるための日本的な表現を英語に持ち込むと、滑稽になるということは、英語ではそのよう表現が許容されない。そうなれば、母語として英語を採用すれば、日本人でも曖昧な表現を滑稽に感じて、明確な表現をせざるを得なくなる。明確な表現、断定的な意志表示がよいと決めれば、母語として英語かフランス語を選んだほうがよくなる、という結論が導き出される。日本語の中で明確に書こうとする努力よりも、明確に書かざるを得ない言語の採用のほうが、文化的アイデンティティが言語によって規定されるという前提に立てば、より有効とある。

鈴木孝夫のこの本は、昭和50年に出版されており、それ以降、日本人のアイデンティティを持って国際的コミュニケーションの道具として英語、すなわち国際英語を勧めているので、彼の考えも変化したと思う。しかし、この本の彼の立論には指摘したような矛盾があると思う。

もう一つ問題になるのは、志賀は明晰な文章の書き手として有名であるが、国語フランス語化論のなかで、日本語の不完全性について言及していても、日本語が非論理的だとか、日本語では明晰な文を書けないとか、言っていないのである。

このように志賀の小論に対して、もっとも真実に反駁した鈴木の論文を検討していくうちに、鈴木の反論が次々に崩壊するのを見た。

鈴木の場合には、日本人のアイデンティティを守るために日本語を捨てるべきではなく、志賀の国語フランス語化論は暴論だ、という主張は出てこない。

そこで、この問題を検討してみよう。(以下次稿)